日本財団 THE NIPPON FOUNDATION 海と日本 PROJECT in 栃木県

栃木発！　海とのつながり発見隊!!
～アユから　海と川を学ぶ～

9月18、19日、10月16日

県内小学生16人が体験

栃木の川と世界の海を守る

「できること」から　さあ…

日本財団が推進する海と日本プロジェクトの一環として「栃木発！海とのつながり発見隊!!　～アユから　海と川を学ぶ～」（海と日本プロジェクトin栃木県実行委員会、とちぎテレビ主催）が9月18、19、10月16の3日間にわたり、県内と茨城県で実施されました。県内在住の小学生16人が、栃木県が日本一の漁獲高を誇る川魚・アユを通じて、海なし県の本県が実は海に大きな影響を与えていることを調査し学びました。子どもたちの体験学習の様子の一部を紹介します。

今回の学習は、栃木県の川で暮らすアユの「アユ丸」が、①川のえさが減った②海のえさが減った③住みにくくなった、と環境の変化を感じていて、栃木県の子どもたちに調査を依頼したという設定。子どもたちに川と海を調査してもらい、川と海のつながり、自分たちとのつながりを知り、これからの環境について考えてもらうことにしました。

川のえさが減った？
アユから川を学ぶ

9月18日は、栃木県の川や茨城県の海について学びました。

初めに県環境森林部の赤羽則臣主査から、栃木県の取り組みについて学び、海洋ごみやマイクロプラスチックが問題になっていることなどを教えてもらいました。

続いて、JSP再資源センターの工場見学のプラスチックの再利用についてのビデオを見ながら説明を受けました。そして、栃木県に流通する魚の窓口となっている会社、宮市の佐藤将夫会長から栃木県に入ってくる魚の変化についてお話をいただきました。

茨城県水産試験場の渡邊直樹研究員からは、ズーム授業で茨城県の海の現状や取れる魚の種類が変わってきていることなどを学びました。お昼には宇都宮東武ホテルグランデが作ってくれた「栃木の海弁当」をみんなで食べました。

翌日は鹿沼市内の大芦川に移動し、実際に川を調査しました。栃木自然塾の関谷忠一塾長から、アユが川で生まれ、海に下って育ち、また生まれた川に戻ってくると説明がありました。だんだんとアユのすみかである岩場が失われていることをしり、子どもたちはアユの生活について考えました。

最後に子どもたちは、学んだことの発表と、「私たちができること」をテーマに、海のポスター「うみぽす」を製作しました。

住みにくくなった？
アユから海を学ぶ

10月16日は、茨城県の海に出掛けて、実際の海を体験しました。

まず阿字ヶ浦海岸に到着。かつては日本一人が集まったといわれるビーチが、港の拡張工事により、海岸浸食が進んでいること。テトラポットの設置で海水浴客やサーファーが減っていることなどを、地元のイバフォルニアマーケットを運営している小池伸秋さんから伺いました。

子どもたちは海の問題を聞き、直接目にして海のために自分たちができることを真剣に考えました。

お昼は大洗まいわい市場で昼食でした。海の恵み、海の幸を味わい、おなかいっぱいになりました。

続いて、直接海を感じ、海の素晴らしさを体験しようと、オリンピック競技にもなったサーフィンに挑戦。大洗サンビーチでプロサーファーの木下デイビッドさんから手ほどきを受けて、海に入り楽しさを満喫しました。同時に海での安全対策や環境問題についてのお話も聞きました。

こうして、海についていろいろな体験をした子どもたちは最後に、今回の体験を通して学んだことや考えたことについて、全員が発表してプロジェクトを終了しました。

佐藤りうさん
（戸祭小学校６年）
海に関する大切なことをたくさん学ぶことができました。美しい海を守っていく心構えを持つようにしたい。

長谷川晴也さん
（桜小学校６年）
海や川に住んでいる生き物、そして自分たちのためにも、きれいな海や川を守りたい。